# 第5章　考　察

## 第1節　須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格

大谷 宏治

### はじめに

本書で報告される須津古墳群のうち千人塚古墳（須津J-第10号墳、以下「千人塚古墳」）、中里K-第95・98・99号墳（以下、本文中では「K - 第」を取り、95、98、99号墳とする。また、富士市内の古墳も同様「アルファベット」と「 - 第」をとって表記する。）[註1]から馬具が出土している[註2]。ここでは、馬具出土古墳の被葬者像を明らかにするため、各馬具の時期的位置づけ、馬具の部品の可能性が高いが用途が明瞭ではない中里98号墳の円形金具の分析と馬装の復原、千人塚古墳出土馬具の位置づけ、東海地方の鉄製轡の分布状況からみる東駿河と須津古墳群の位置づけを明らかにした上で、馬具副葬古墳の被葬者像を考えたい。

### 1　中里古墳群の馬具について

#### (1) 中里古墳群出土の馬具

報告の記載と重複するが、ここでは中里古墳群から出土した馬具とその時期的位置づけを確認したい。

**中里95号墳（中里大久保古墳）**　95号墳では、鉸具造立聞環状鏡板付轡（以下､環状鏡板付轡は「円環轡」とする）1組、轡の鉄製引手1点、木製壺鐙の吊金具である兵庫鎖2組が出土していることから､2組の馬具が副葬されていた。引手のみの轡は、金銅装辻金具､雲珠などが確認されていないことや、鐙が木製壺鐙の吊金具（兵庫鎖）のみであることを考慮すると円環轡であった可能性が高い。

**中里98号墳**　98号墳では、大型矩形立聞円環轡1組、鉄製円形金具8点以上（9点か、環状辻金具･雲珠か？）[註3･4]、金銅装方形帯金具（4鋲）14点、金銅装長方形帯金具（2鋲）11点（うち、責金具が伴うもの4点）が出土している。後述するとおり筆者は円形金具の位置づけにより馬具の組数が異なるが､98号墳には馬具1組のみが副葬されたと考える。

**中里99号墳**　99号墳では、大型矩形立聞円環轡1組、金銅装方形帯金具2点、鉄製隅切長方形帯金具1点、刺金のない鉄製鉸具2点が出土している。当古墳も1組の馬具が副葬された可能性が高い。

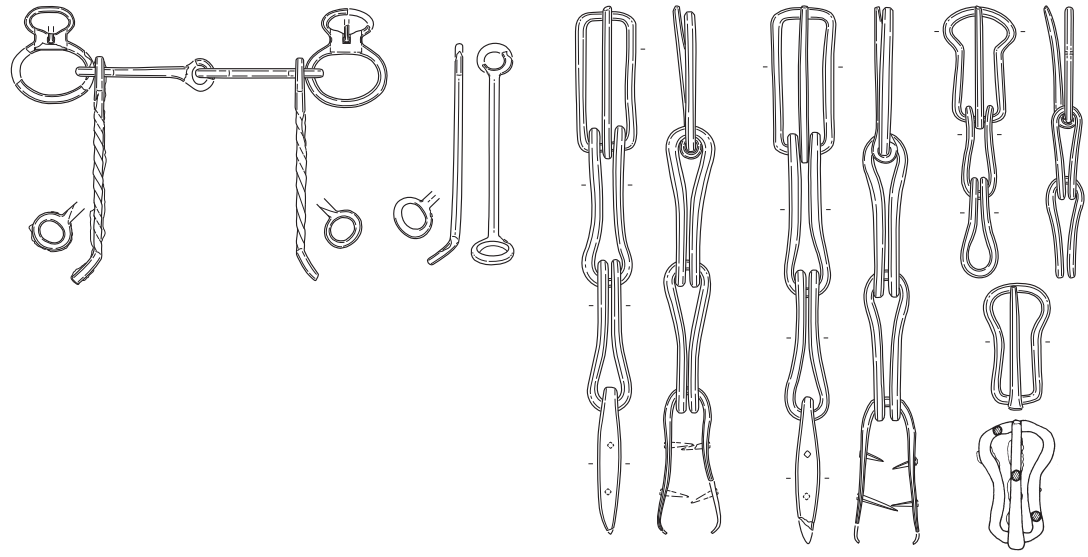
なお、今回報告する3基の古墳から、轡は計4点出土しているが、金銅装半球状鉢をもつ辻金具・雲珠が副葬された様子はなく、また鞍に伴う鞍、磯・海金具、杏葉は出土していないことを勘案すると、いずれも簡素な馬装であった可能性が高い。

#### (2) 時期的位置づけ

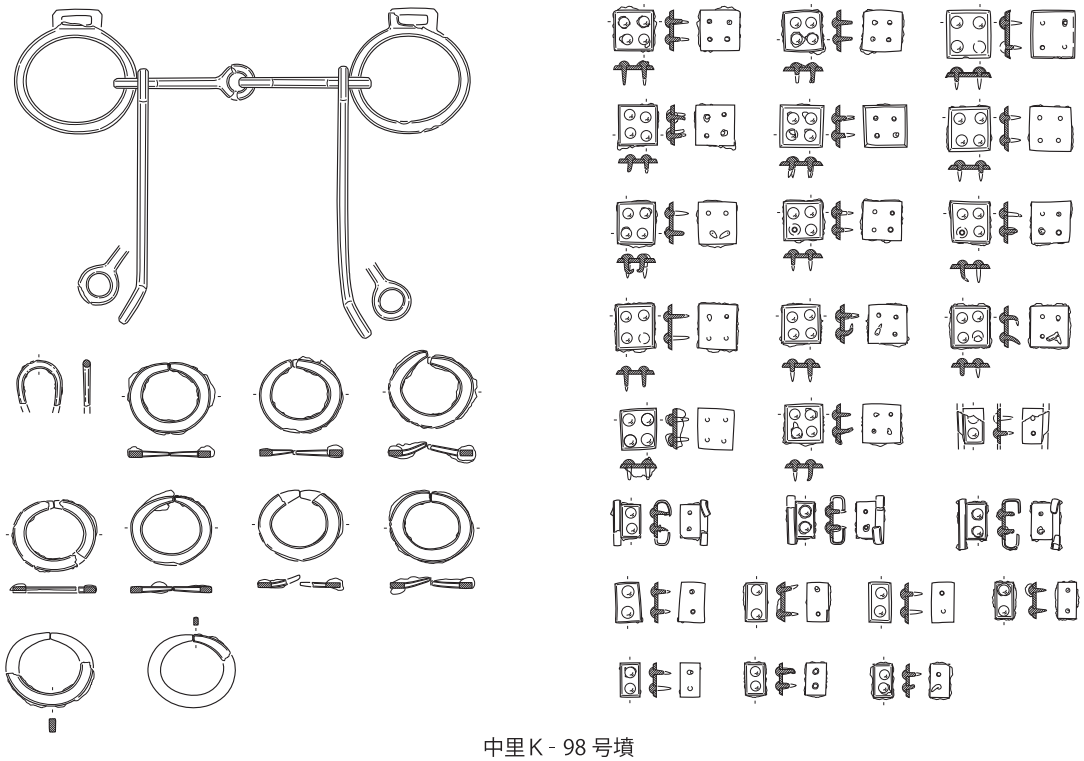
**轡**　鉄製円環轡の時期は、岡安光彦氏による編年（岡安1984）では、環が大きなものから小さなものに変化すること、TK217型式併行期（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半）[註5]は、鉸具造立聞円環轡は7.1 × 6.4cmのものが位置づけられ、この分析を参考にした大型矩形立聞円環轡は、縦7.1 × 7.0cmが当該期の基準とされる（岡安1985)。この基準に従えば、これより大きい98・99号墳例はTK209型式期（遠江編年Ⅲ期後葉）以前に、95号墳例はTK217型式期（飛鳥Ⅱ期、遠江編年Ⅳ期前半）に位置づけることができる。

**鐙**　95号墳の木製鐙の吊金具である兵庫鎖は、おそらく兵庫鎖3連できのこ形の鉸具を有するものと、兵庫鎖が2連で長方形に近い鉸具をもつものの2組があり、前者は斎藤分類三D式、TK43～TK209型式（遠江Ⅲ期中葉～Ⅲ期後葉）併行期に、後者は三E式、TK209型式併行期に位置づけられる（斎藤1986）が、富士市船津62号墳（富士市教委2013）では飛鳥Ⅱ期にも用いられており、TK209型式～飛鳥Ⅱ期（TK217型式併行期）に位置づけておくのが妥当である。

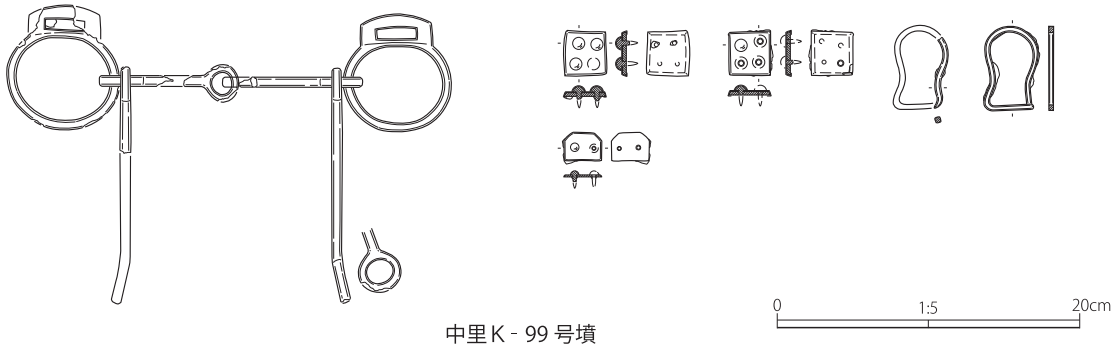
**帯金具**　帯金具は、岡安光彦氏の研究では、98・99号墳の正方形4鋲の帯金具は板状で金銅装であ



中里K - 95 号墳



中里K - 98 号墳




中里K - 99 号墳

**第 86 図　中里古墳群出土馬具**

ることから、TK209 型式併行期に位置づけることができる（岡安 1987）。

**円形金具**　98 号墳出土の円形金具の位置づけは後述するが、筆者は帯金具と組合されて辻金具・雲珠を構成すると考えるため、帯金具と同様 TK209 型式期に位置づけるのが妥当である。

したがって、98・99 号墳の馬具は、轡と帯金具から TK209 型式期に位置づけられる。95 号墳は、圭頭大刀が TK209 型式期に位置づけられることから、三 D 式鐙と型式不明の轡（引手のみ出土）の馬具セットは TK209 型式期の可能性がある。一方、鉸具造立聞円環轡、三 E 式鐙は飛鳥Ⅱ期である。95 号墳は、TK209 型式期と飛鳥Ⅱ期に位置づけることが妥当である。

各古墳の馬具の時期は、馬具以外の副葬品の時期的様相とも合致しており、整合的である。

### （3）中里 98 号墳出土馬具からみた馬装の復元

#### ア　鉄製円形金具について

上述したとおり、98 号墳から鉄製円環轡、金銅装帯金具、鉄製円形金具が出土している。このなかで 8 点以上の円形金具が確認されたことが特筆できる。馬具の部品と断定できないものの[註 6]、ここで分析するとおり馬具の可能性が高いと考える。

当古墳では半球状鉢や板状の辻金具・雲珠は副葬されていないが、帯金具が 2 種 29 点と多いことから、円形金具に帯金具を組合せて環状辻金具・雲珠として用いたと想定できる。一方、同様の金具が出土した群馬県八幡観音塚古墳例における宮代栄一氏の検討では轡を伴わない「無口頭絡」[註 7]に用いられた可能性が想定されている（宮代 2016）。

したがって、98 号墳の馬装を復原するにあたり、円形金具の機能を明らかにする必要があるため、円形金具の出土例を確認し、その位置づけを探る。

**中里 98 号墳の鉄製円形金具**　円形金具は、断面板状の鉄板（棒）を折り曲げて円形に成形したものであり、最低 8 点、最大 9 点出土している[註 8]。改めて特徴を確認すると、図面上部に鉄板を円形に折り曲げた時の痕跡である鉄板の両端の合わせ目が確認できる。あたかも耳環のようにも見えるが、耳環と比較すると大きさは倍以上であり、先端はしっかりと合わせられ隙間はないことから耳環である可能性はない。

**円形金具の特徴**　出土状況が明確であれば用途が特定できるが、追葬や盗掘などにより当初の位置を離れてしまうと、円形という単純な形態だけに用途を明らかにするのは難しい。98 号墳例も出土位置は不明確である。上述したように円形金具は当古墳以外にも、群馬県八幡観音塚古墳など複数の古墳から出土している。

では、果たしてこの金具は何なのか？この課題に対し私案を示すため、まず集成を示す（**第 3 表、第 87 図**）。集成に際し、円形であること、断面が板状（長方形）であること、古墳時代後期後半に位置づけられるものを条件とした。これまでに集成図が公表されている埼玉県、群馬県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、福岡県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県などの事例を確認してまとめた。まだ多くの事例が遺漏している可能性が高い。

材質をみると、栃木県下石橋愛宕山古墳例（**第 87 図 8**）[註 9]と大阪府奥山 1 号墳例が金銅装である以外はいずれも鉄製である。直径は 4 ～ 5.5cm 前後（小型）、6 ～ 7cm 前後（大型）の 2 つの大きさに区分することができよう。

小型の島根県岡田山 1 号墳例（**第 87 図 5**）[註 10]、金銅装で複数種類が出土している下石橋愛宕塚古墳では、金具に 3 条の帯が取り付けられていた痕跡が確認されており、帯の交点に取り付けられたものであることが明白である。また、1 段階古い段階の奈良県市尾墓山古墳例（高取町教委 1984）では 5 点の円形金具が出土し、1 点には別造りの帯金具と帯が銹着しており、4 条の帯が取り付けられていること、この他の 1 点にも 3 状の帯の痕跡が残ることから組合式環状雲珠である。同じく 1 段階古い三重県ツヅミ 2 号墳例（**第 87 図 3**）は円形金具に 4 つの兵庫鎖が取り付けられている。このような事例から判断して、円形金具は帯の交点に用いられたものであり、馬具で 3・4 条の交点に用いられたとすると、環状の辻金具あるいは雲珠の可能性が高い。

**円形金具は環状辻金具・雲珠か？**　環状辻金具・雲珠について、辻金具・雲珠を総合的に分析した宮代栄一氏は、別造りの脚部を組合せる（組合式）環

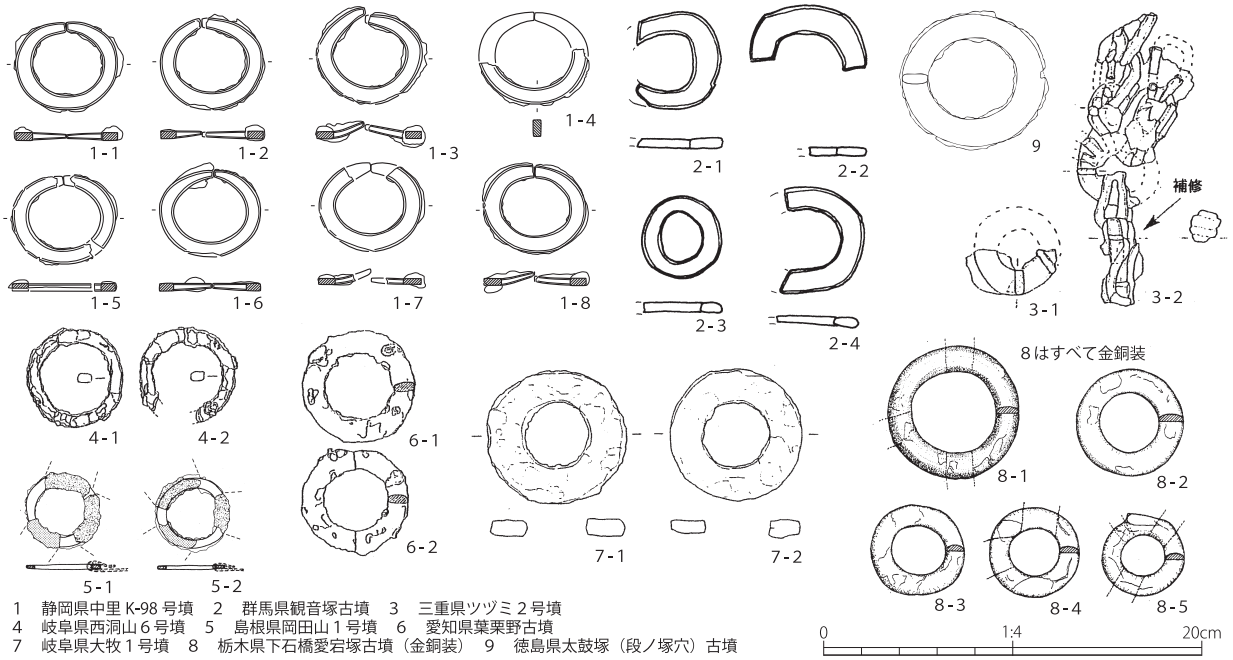
状辻金具・雲珠は中期後半から採用され、後期前半には半球状鉢の辻金具・雲珠の盛行により採用数が減少し、後期後半まで用いられる可能性は低いことを指摘する（宮代 1996a ほか）。また、宮代氏は円形金具と方形帯金具が出土した福岡県飯氏二塚古墳例、京都府物集女車塚古墳例[(註 11)]を環状辻金具・雲珠に復元している（宮代 1995・1996a、**第 88 図**）。この復元例からみれば、中里 98 号墳例は飯氏二塚古墳の組合式環状辻金具の円形金具と同様の大きさであり、かつ共伴する方形帯金具は 4 鋲で同一であることから判断し、帯金具と組合せて用いられた環状辻金具と判断できる。この想定が正しければ、98 号墳同様方形帯金具、長方形帯金具が多数出土している岐阜県西洞山 6 号墳（**第 87 図 4、第 88 図**）は、円形金具の法量が 98 号墳と同一であり、且つ方形帯金具の鋲数が異なるだけであることから判断して、この古墳例も組合式環状辻金具である可能性が高い。



**第 3 表　円形金具の類例**

| 古墳名 | 所在地 | 墳形 | 規模 | 数量 | 帯金具 | 法量 | 轡 | 杏葉 | 雲珠・辻金具 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下石橋愛宕塚古墳 | 栃木県下野市 | 円 | 85 | 5 | 有 | 4.1 ～ 6.9 | 花形、大型矩形 | 花形 | 金辻・雲珠 | 栃木県教委 1974 |
| 古城稲荷山古墳 | 群馬県伊勢崎市 | 後円 | 55.2 | 6 | 有 | 詳細不明 | 楕円形？・花形轡 | 花形 | 金辻 | 群馬県古墳研 1996 |
| 八幡観音塚古墳 | 群馬県高崎市 | 後円 | 98 | 4 | 有 | 4.0 ～ 5.2 | 花形、鏡轡、大型矩形他 | 心葉形他 | 多数 | 宮代 2016 |
| 中里 K-98 号墳 | 静岡県富士市 | 不明 | - | 8+ | 有 | 5.2 ～ 5.6 | 大型矩形 | - | - | 本書 |
| 小幡茶臼山古墳 | 愛知県一宮市 | 後円 | 63 | 2 | 有 | 4.0, 不 | 十字文楕円形？ | - | 金辻 | 東海古墳文化研 2006 |
| 葉栗野古墳 | 愛知県一宮市 | 円？ | - | 2 | 有 | 5.6 | 不明 | - | 金辻 | 東海古墳文化研 2006 |
| 大牧 1 号墳 | 岐阜県各務原市 | 後円 | 30+ | 2 | - | 7.2 | 瓢形 | 三楕円 | 鉄雲・辻、金辻 | 東海古墳文化研 2006 |
| 西洞山 6 号墳 | 岐阜県各務原市 | 円 | 12 | 2 | 有 | 5.2 ～ 5.6 | 兵庫鎖素環・大型矩形 | - | 金無脚雲珠 | 各務原市教委 1991 |
| 物集女車塚古墳 | 京都府向日市 | 後円 | 45 | 3 | 有 | 2.4 ～ 4.8 | f 字形・大型矩形 | 剣菱・馬鐸他 | 金辻・雲珠 | 向日市 1988 |
| 奥山 1 号墳 | 大阪府寝屋川市 | 円 | 15 | 2 | 有 | 5.3 ～ 5.9 | 大型矩形 | - | - | 大阪府文化財セ 2007 |
| 岡田山 1 号墳 | 島根県松江市 | 後方 | 24 | 2 | 無 | 3.9 | 透十字文心葉形 | - | 金辻・雲珠 | 島根県教委 1987 |
| 太鼓塚古墳※ | 徳島県美馬市 | 円 | 34 | 1 | 無 | 6.6 ～ 7.1 | 不明 | - | - | 天羽 1976 |
| 臼塚古墳 | 熊本県山鹿市 | 円 | 22 | 2 | 有 | 3.4,7.3 | 環状鏡板付轡 | - | 金雲など | 宮代 1996c |
| ★ツヅミ 2 号墳 | 三重県津市 | 円 | 9 | 2 | 不明 | 4.4,5.2 | 吊金具素環・変形内湾 | - | - | 安濃町教委 1999 |
| ★市尾墓山古墳 | 奈良県高取町 | 後円 | 65 | 5 | 有 | 4.8 ～ 6.8 | 不明 | 剣菱・花弁形 | 金辻 | 高取町教委 1984 |
| ★飯氏二塚古墳 | 福岡県福岡市 | 後円 | 49.6 | 2 | 有 | 5.0,6.4 | - | - | - | 宮代 1995 |

※太鼓塚古墳＝段ノ塚穴古墳（天羽 1976）　★＝参考例　古墳時代後期前半
墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　後方＝前方後方墳　不＝墳形不明
轡　f 字形 =f 字形環状鏡板付轡　花形＝花形鏡板付轡　楕円形＝楕円形鏡板付轡　大型矩形＝大型矩形立聞環状鏡板付轡　瓢形＝瓢形環状鏡板付轡
兵庫鎖素環＝兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡　吊金具素環＝吊金具付環状鏡板付轡　変形内湾＝変形内湾楕円形鏡板付轡
吊金具素環＝吊金具付素環環状鏡板付轡
杏葉　剣菱＝剣菱形杏葉　花形＝花形杏葉　心葉形＝心葉形杏葉　三楕円＝三葉文楕円形鏡板付轡
雲珠・辻金具　金＝金銅装　鉄＝鉄製　辻＝半球状鉢辻金具　雲＝半球状鉢雲珠




1　静岡県中里 K-98 号墳　2　群馬県観音塚古墳　3　三重県ツヅミ 2 号墳
4　岐阜県西洞山 6 号墳　5　島根県岡田山 1 号墳　6　愛知県葉栗野古墳
7　岐阜県大牧 1 号墳　8　栃木県下石橋愛宕塚古墳（金銅装）　9　徳島県太鼓塚（段ノ塚穴）古墳

**第 87 図　円形金具の類例**

ここで集成した後期後半に位置づけられる円形金具が出土した古墳について分析すると、中里98号墳、西洞山6号墳のように帯金具が多く出土した古墳は確認できないが、方形・長方形帯金具が10数点確認される場合は組合式環状辻金具・雲珠を構成すると考えてよい。また別造りの脚部（帯金具）を伴わないものも、岡田山1号墳例や下石橋愛宕塚古墳例から環状辻金具、雲珠と想定したい。

**円形金具と轡形式の相関関係**　中里98号墳例は大型矩形立聞円環轡と同一の組合せであり、西洞山6号墳では兵庫鎖立聞素環円環轡、大型矩形立聞円環轡が出土しているが、98号墳例と類似性が高いことから大型矩形立聞円環轡と同一馬装に用いられた可能性を想定する。さらに組合式環状辻金具ではないが、物集女車塚古墳は大型矩形立聞円環轡と組合式環状雲珠が同一馬装であった可能性が高い。TK43型式期以降の組合式環状辻金具・雲珠は大型矩形立聞円環轡と親縁性が高い。この組合は普遍的か。

**第3表**には円形金具が出土した古墳から出土している轡を示した。下石橋愛宕塚古墳例、奥山1号墳例は大型矩形立聞円環轡が出土しているものの金銅装であることから組合される可能性は低い。また、下石橋愛宕塚古墳例は花形鏡板付轡と組合される可能性が高い。この他では八幡観音塚古墳例が大型矩形立聞円環轡と組み合わされる可能性があるものの現状では不明である。

したがって、確実に組合せられたとは断定できないものの、大型矩形立聞円環轡と親縁性が高いことを述べておきたい。

**イ　馬形埴輪に表現された円形金具**

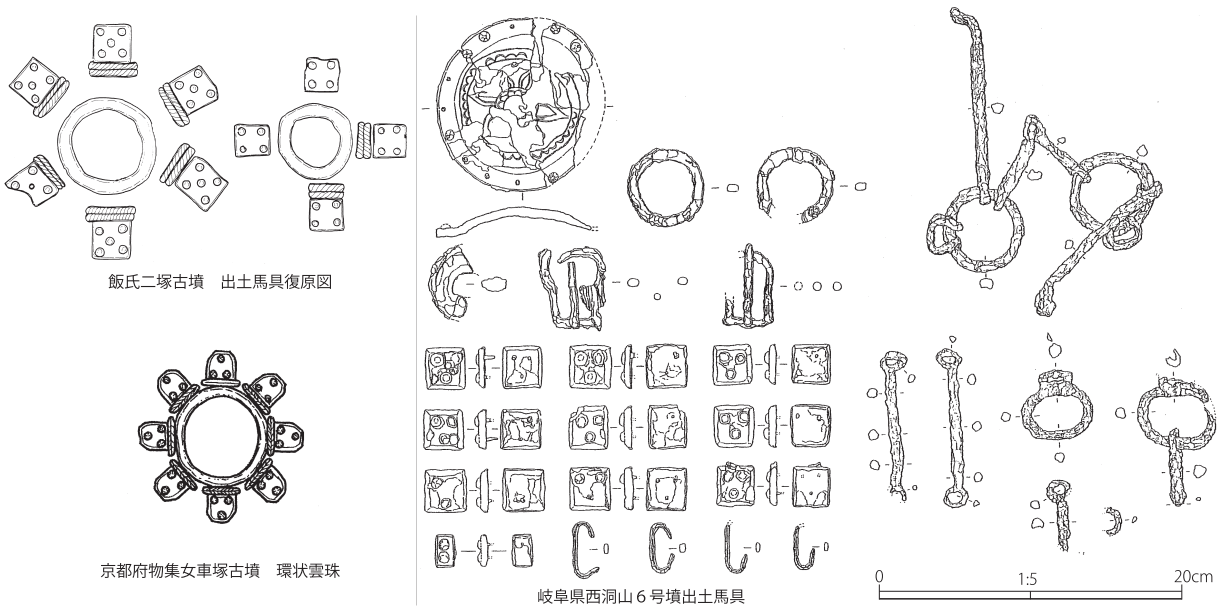
馬形埴輪に円形金具を表現したと想定できるものがあることから、馬形埴輪に表現された円形金具について確認しておきたい。

**円形金具を用いた可能性のある馬形埴輪の面繋**

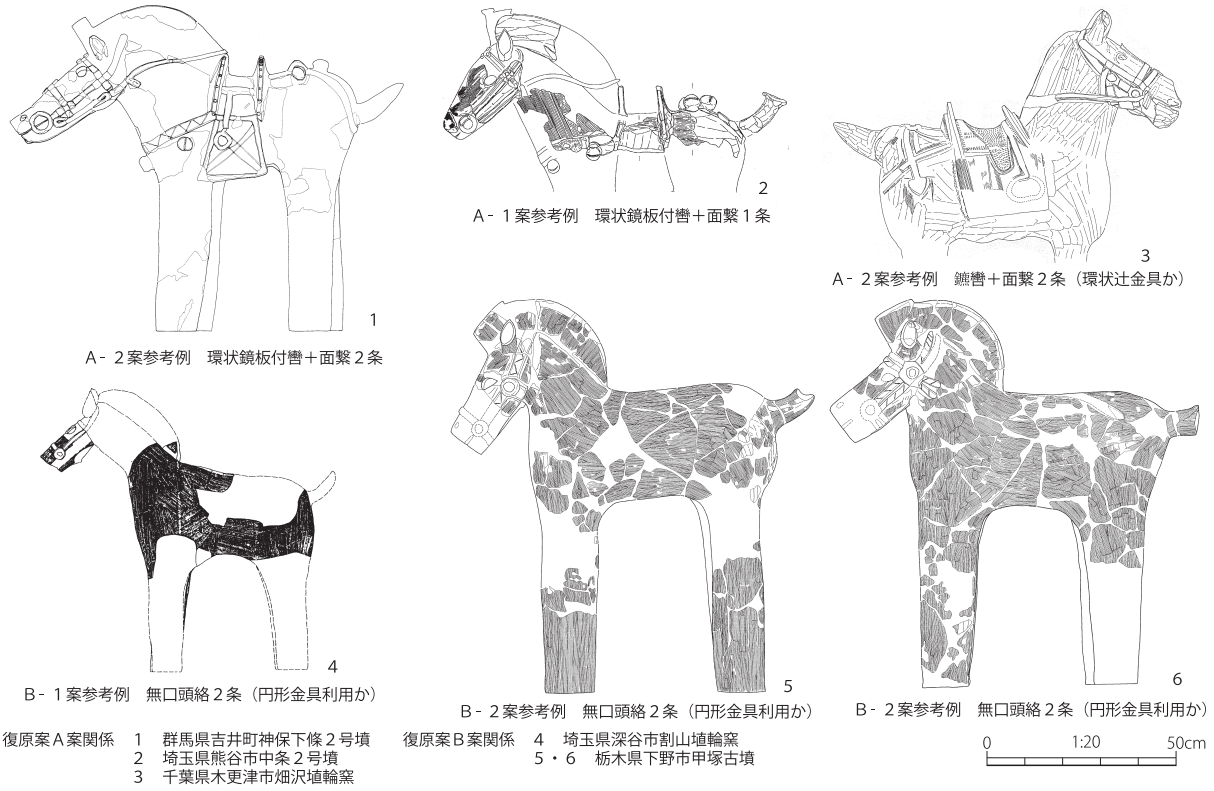
円形金具を表現したと想定できるものは畑沢埴輪窯出土馬形埴輪（**第89図3**）があり、轡は鑣轡であるが、円形金具は轡に繋がる帯ではなく、別の帯の交点に用いられる。この轡の面繋と繋索用の面繋を合わせて用いられた可能性があるものの、同一の面繋に用いられたといえる。

また、確実に円形金具を表現したとは断定できないものの、帯金具が十字に表現され、中央部を半球状に膨らませる表現がない馬形埴輪は、群馬県神保下條2号墳例（**第89図1**）、埼玉県中条2号墳例（**同2**）などがあることから、これらは帯金具の中央に円形金具が用いられ、組合式環状辻金具を表現したと想定したい。

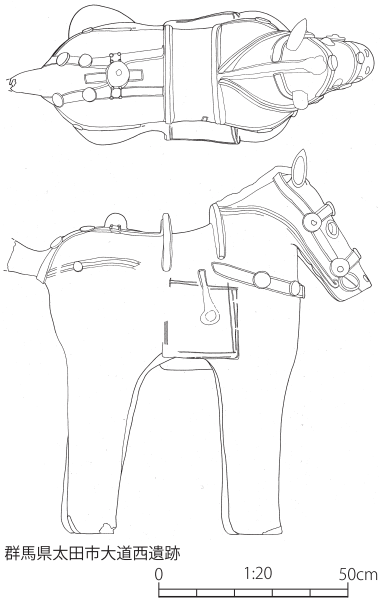
**円形金具は「無口頭絡」の金具か？**　円形金具を用いて面繋を表現しているが轡が伴わないものは、




**第88図　環状辻金具・雲珠と中里98号墳出土例と類似する馬具の組合せ（西洞山6号墳）**




**第 89 図　円形金具が用いられた可能性が高い馬装が表現される馬形埴輪**




**第 90 図　中里 98 号墳の馬装を復原するための参考事例**

無口頭絡を表現したと想定できる。こうした馬形埴輪は、いずれも鞍を伴わない、いわゆる「裸馬」で、大阪府伝仁徳天皇陵古墳出土例（堺市博 1972）、奈良県荒蒔古墳出土例、栃木県甲塚古墳の 2 例（**第 89 図 5・6**、下野市教委 2014）などがある[註 12]。

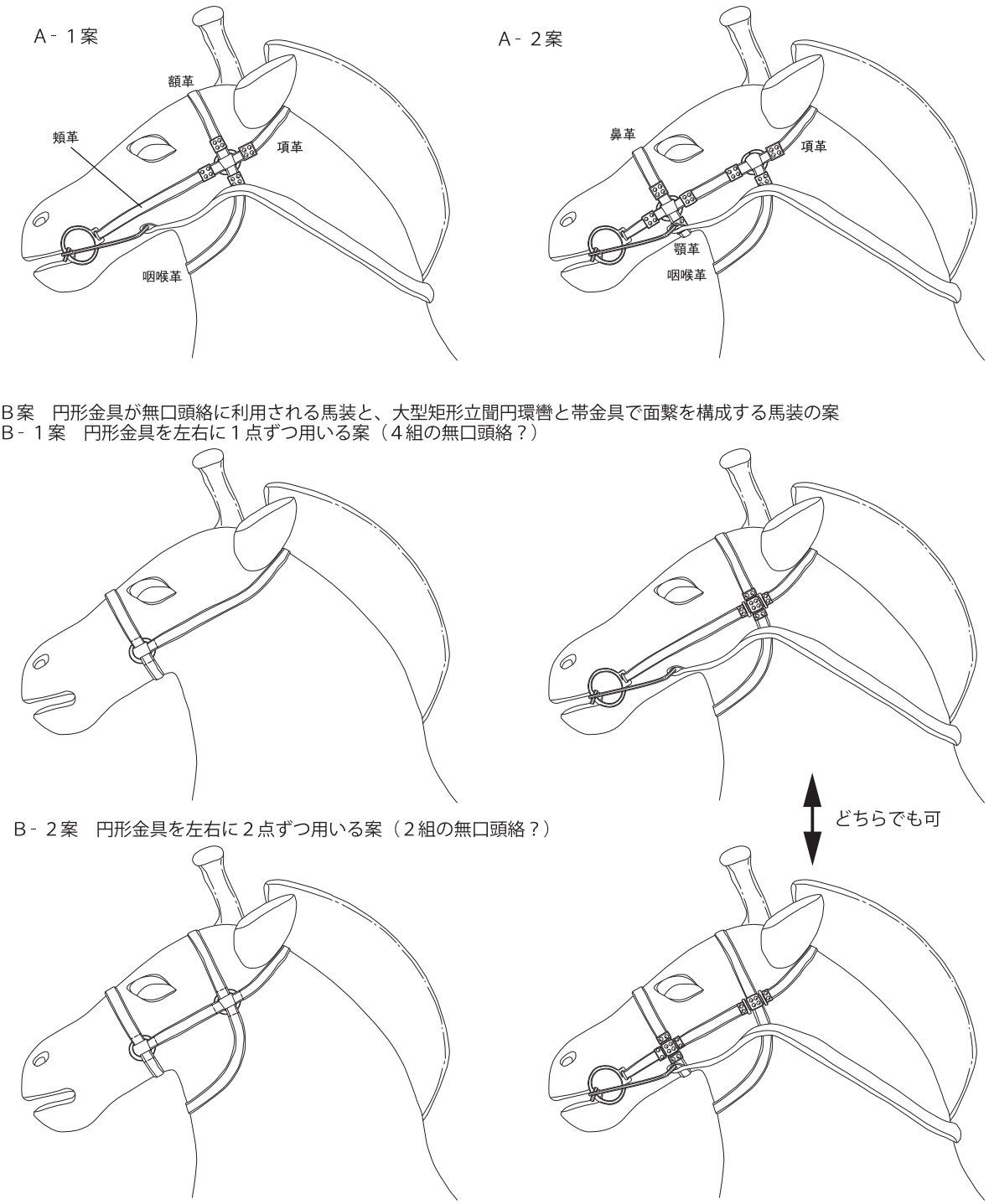
片側に 2 点ずつ用いる伝仁徳天皇陵古墳出土例、甲塚古墳出土 2 例と、片側に 1 点のみ用いる荒蒔古墳例があり、古墳時代の無口頭絡に両者が存在した可能性が高い。

なお、宮代栄一氏は、畑沢埴輪窯出土の馬形埴輪例（**第 89 図 3**）の面繋の表現を参考に、徳島県太鼓塚古墳例や、群馬県高崎市八幡観音塚古墳例（**第 87 図 2 - 1 ～ 4**）[註 13] を轡を伴わない「無口頭絡」である可能性を指摘しており（宮代 2016）、太鼓塚古墳例を、円形金具 4 点を用いた単条系辻金具 4 点装着として面繋を復原している（宮代 1996b、**第 91 図** B-2 案に近い状況に復元）。

上述した通り埴輪表現では、畑沢埴輪窯例のように轡の面繋とは異なる無口頭絡を組合せて用いた可能性も想定する必要があるが、現状で畑沢例のような埴輪表現は他には事例がないことから、ここでは組合式環状辻金具の可能性と、無口頭絡の辻金具であることを確認しておきたい。

### ウ　中里 98 号墳馬装の復原

このとおり、中里 98 号墳の円形金具は帯金具と組合される環状辻金具・雲珠あるいは、無口頭絡の辻金具の可能性があることから、それぞれで想定さ




**第 91 図　中里 98 号墳出土馬具から復原する馬装**

れる馬装復元案を提示する（第 91 図）。

**（ア）馬装復原 A 案**　A 案は円形金具と別造りの帯金具（脚部）で構成される組合式環状辻金具と大型矩形立聞円環轡で面繋を構成するもので、円形金具を 2 点（片側に 1 点ずつ）面繋に使用し、残りの 6 点の円形金具を尻繋に用いる馬装（A-1 案）、円形金具を 4 点（片側に 2 点ずつ）面繋に使用で、残りの 4 点は尻繋に用いるパターン（A-2 案）である。いずれも馬具は 1 組のみであると想定する。

A 案が馬形埴輪に表現された事例として、A-1 案では中条 2 号墳例（第 89 図 2）、A-2 案では神保下條 1・2 号墳（第 89 図 1）、太田市世良田諏訪下 23 号墳

（太田市教委 2009）、埼玉県行田市酒巻 14 号墳（熊谷市教委 2004）などを挙げることができる。

A-2 案の場合は、正方形の帯金具を轡側は片側 4 個、耳側を 3 個利用すると想定した場合、正方形金具の必要数が出土していることになる。残りは、円環金具 4 点と長方形帯金具を尻繋で利用した可能性が高い。筆者は、A 案の場合は A-2 案の可能性が高いと想定する。

なお、円形金具が環状雲珠として用いられたと想定する A 案の事例として、群馬県太田市大道西遺跡（群馬県埋文 2011）出土の馬形埴輪が参考となる（**第 90 図**）。円環轡で面繋は 2 条であるが辻金具は円形に表現されるものの環状かは不明であるが、尻繋は鋲表現のある帯金具 2、円形 4、半球状鉢四脚雲珠の 7 点が表現されており、中里 98 号墳例はこのような馬装であった可能性がある。

**（イ） 馬装復原 B 案**　円形金具を無口頭絡の辻金具として用いるもので、円形金具を 2 点（片側に 1 点ずつ）用いるもの（B-1 案）で最大無口頭絡が 4 組副葬される。あるいは 4 点（片側に 2 点ずつ）用いるもの（B-2 案）で、2 組の無口頭絡が副葬される。さらに大型矩形立聞円環轡と帯金具の馬具セットが副葬され、3 〜 5 組の馬具が副葬された可能性がある。

馬形埴輪の事例では、B-1 案については、奈良県天理市荒蒔古墳例（天理市教委 2011）、大阪府高槻市今城塚古墳例がある。B-2 案については、伝仁徳天皇両古墳出土例、甲塚古墳馬形埴輪、埼玉県深谷市割山埴輪窯例（**第 89 図 4**、宮崎 1987）などに確認できる。

なお、B 案に伴う、大型矩形立聞円環轡と帯金具の馬具セットの復元は、宮代氏の分類（宮代 1996b）による単条系（**第 91 図**右側中段）、複条系（同右側下段）のもののどちらでも成り立つ。

**筆者の意見**　中里 98 号墳の馬装復元について A 案、B 案ともに想定可能である。ただし、B 案の無口頭絡が副葬されたかどうかは、余程有機質の面繋の残存状況が良好な状態で出土しないことには証明しようがない。無口頭絡が副葬されていたかを判断するのに円形金具のみとなり、このような簡素な馬具が副葬されたかは研究者の考え方次第のところがあり、実際に副葬されたかの判断は非常に難しい。また、中里 98 号墳に限れば、騎乗用馬具 1 組、無口頭絡 2 組あるいは 4 組となると、はたして無口頭絡を騎乗用馬具よりも多く副葬するものだろうか？

筆者は後期前半に用いられた組合式環状辻金具・雲珠と法量、形態が同一であること、馬形埴輪にも円形金具を用いた可能性がある辻金具と円環轡を表現したものがあること、簡素な繋索用の頭絡金具のみが副葬された可能性は低いと考えることから、A 案、その中でも円形金具を片側各 2 点、両側計 4 点、それぞれに別造りの帯金具が組合される環状辻金具と判断し、A‐2 案の可能性が高いと想定している。

### （4）復原案から想定される馬装の意味

ここでは、A・B 案が成立した場合、どのような意味があるかを考えたい。

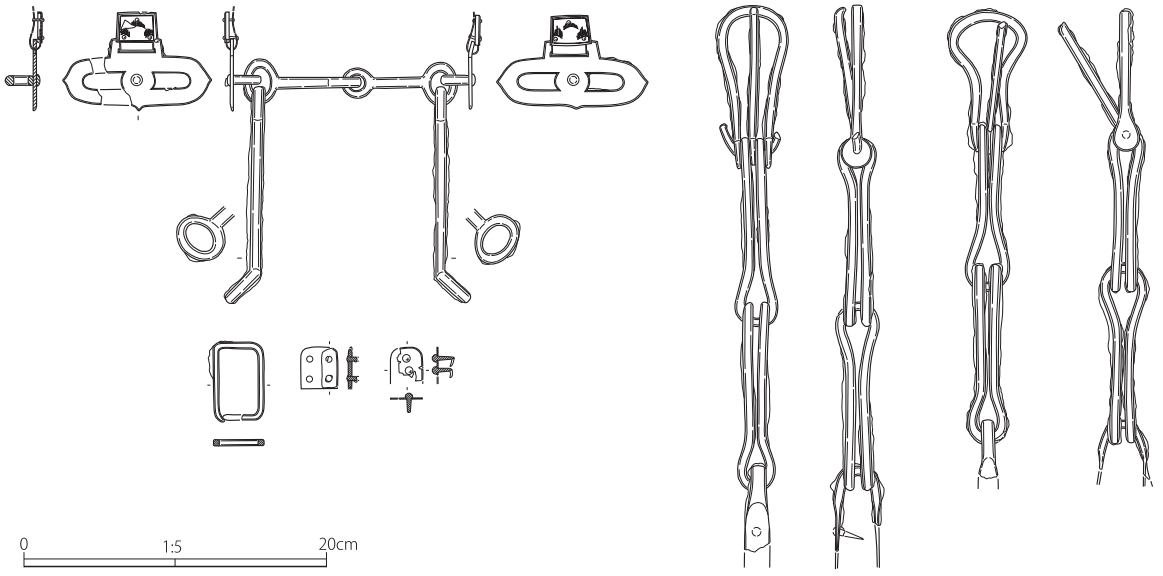
まずは A・B 案ともに規格性が高い大型矩形立聞円環轡を用いていることであり、畿内王権との関わり（大谷 2006）が想定できることは共通する。

**A 案の想定される意味**　A 案の場合、轡は新しい形式である大型矩形立聞円環轡を用いるものの、古墳時代中期後半から末葉に主に採用され、一部後期前半〜後期後半まで用いられた、古い馬装を継承する組合式環状辻金具を利用していることとなり、伝統性を重視した馬装と把握することができようか。

また、A 案の場合は、組合式環状雲珠を用いた尻繋が用いられていた可能性が高いことから、面繋馬装よりもやや階層性が高い馬装であった可能性が高い。

**B 案の想定される意味**　B 案の場合、鉄製轡＋帯金具の 1 組とともに、無口頭絡 2 組以上副葬したこととなる。無口頭絡の副葬が特徴的であり、厩舎や放牧時の馬の状況を表現しているとすれば、馬匹生産を象徴的に示している可能性がある。

筆者は上述したとおり、A 案の可能性が高いと考えており、伝統的な組合式環状辻金具と大型矩形立聞円環轡で構成される面繋の馬装と考え、古い時代の馬装を用いることで、伝統の継承やそれに基づく支配の正当性などを表現していた可能性があると考える。




第 92 図　千人塚古墳出土馬具

## 2　千人塚古墳の馬具について

### (1) 千人塚古墳の馬具

千人塚古墳からは、金銅装吊金具付鉄製横長心葉形鏡板付轡（「方形鏡板付轡」と呼称される場合もある。以下、「横長心葉形轡」とする）1 組、鉄製鋲具造立聞円環轡 1 組、木製壺鐙の吊金具である鉄製兵庫鎖 2 組、金銅製帯金具 1 点、鉄製帯金具 1 点、腹帯金具と想定する長方形の鉄製金具 1 点が出土している（**第 92 図**）[(註 14)]。

全国的にみても類例が少ない横長心葉形轡が富士市内で千人塚古墳、東平 1 号墳（富士市教委 2018）と 2 例出土していることが特筆できる。

横長心葉形轡については、後述するとおり筆者の編年 I 段階（大谷 2018）、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉）に位置づけることができる。兵庫鎖は鋲具の形状や兵庫鎖の長さが異なることから別個体である可能性が高いが、いずれも齊藤三 E 類（齊藤 1986）に分類できることから、TK209 型式期～飛鳥Ⅱ期に位置づけることができる。帯金具についても飛鳥Ⅱ期に位置づけることが可能である。鋲具造立聞円環轡は図化されていないため細部の特徴が不明確であることから時期を特定することは難しいが、鋲具の頸部と頭部の境界が不明瞭であることから、飛鳥Ⅱ期に位置づけてよいと考える。

したがって、鐙金具を含め千人塚古墳出土馬具はいずれも飛鳥Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

### (2) 千人塚古墳出土横長心葉形鏡板付轡について

筆者は東平 1 号墳の報告書作成に当たり、横長心葉形轡の分析を行った（大谷 2018）ため、それに基づき当古墳出土例の位置づけを確認したい。

**特徴**　轡の連結方法は、銜先環に遊環、引手を連結し、鏡板は遊環とリベット留めされる。この特徴は、松尾光晶氏（松尾 1999）による C 技法（筆者による「遊環リベット留・銜介在型連結」）であり、横長心葉形轡に共通する連結方法である（大谷 2018）。

鏡板は鉄製で、下と側面両側に突起がある。立聞は大型矩形立聞であり、この特徴も他の轡と共通する。

鏡板は吊金具により面繋と連結される。吊金具は帯金具は金銅板を箱形に折り曲げたものと金銅製吊脚とを金銅鋲 3 鋲で革帯に固定されるものである。吊金具には光芒文が 3 個刻まれている。この形状の吊金具は多くなく数例を数えるに過ぎない。埼玉県東松山市古凍 14 号墳、東平 1 号墳、愛知県豊橋市上向嶋 2 号墳出土の大型矩形立聞円環轡のものと共通する。また、この吊金具は、金銅装馬具では、滋賀県大津市中山古墳でも確認されており、この 3 者が近しい工房で生産された可能性が想定でき、当該轡は大型矩形立聞円環轡の生産と近い位置にある可能性が高いことがわかる（大谷 2018）。

銜は二連銜で、引手は一条線引手・く字形引手壺で、銜先環に連結される。

**第 4 表　横長心葉形鏡板付轡一覧**

| 遺跡名 | 所在地 | 墳形 | 規模 | 埋葬 | 分類 | 材質 | 連結 | 轡 | 花弁 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 成田 3 号墳 | 茨城県行方市 | 円 | 18 | 横石 | Ⅰ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | - | ● | 1 |
| 宮中野 99-1 号墳 | 茨城県鹿嶋市 | - | - | 土坑 | Ⅱ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | 鏡轡 | ● | 2 |
| 六孫王原古墳 | 千葉県市原市 | 後円 | 46 | 不明 | Ⅱ | 金銅 | 遊環リベット留・銜介在 | - | - | 3 |
| 塚原出土 | 群馬県みなかみ町 | - | - | - | − | 金銅 | （未確認） | - | - | 4 |
| 御門 1 号墳 | 群馬県昭和村 | 円 | 11 | 横石 | Ⅱ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | 双環式円板轡 | ● | 5 |
| 若田 B 号墳 | 群馬県高崎市 | 円 | 14 | 横石 | Ⅰ | 鉄 | - | - | ● | 6 |
| 御崎古墳 | 山梨県笛吹市 | 古墳 | - | 横石 | Ⅱ | 金銅 | 遊環リベット留・銜介在 | - | ● | 7 |
| 東一本柳古墳 | 長野県佐久市 | 円 | 10+ | 横石 | Ⅰ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | | ● | 8 |
| 御蔵上 3 号墳 | 静岡県長泉町 | - | - | 横石 | Ⅱ | 金銅 | 遊環有？・銜介在？ | - | ● | 9 |
| 東平 1 号墳 | 静岡県富士市 | 円 | 13 | 横石 | Ⅰ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | 大型矩形円環轡※ 1 | ● | 10 |
| 千人塚古墳 | 静岡県富士市 | 円 | 21 | 横石 | Ⅰ | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | 鉸具造円環轡 | - | 本書 |
| 白砂ヶ谷 D2 号墳 | 静岡県藤枝市 | 円 | 10 | 横石 | - | 鉄 | 遊環リベット留・銜介在 | - | - | 11 |

略記　墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　花弁＝棘付花弁形杏葉の有無
※1　東平 1 号墳出土の轡は帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡。



**編年的位置づけ**　筆者は、佐藤信孝氏（佐藤 2005）、白井久美子氏（白井 2002）などの先行研究を参照し、前稿（大谷 2018）で、横長心葉形轡を、鏡板の心葉形の隅角が丸みを帯びるもの（Ⅰ類）、心葉形の形状から逸脱するもの（長方形に近いもの、半月形のもの、Ⅱ類）に区分し、Ⅰ類をⅠ段階に、Ⅱ類をⅡ段階に位置づけた。千人塚古墳は鏡板の心葉形の隅角が東平 1 号墳同様丸みを帯びることからⅠ類、Ⅰ段階（飛鳥Ⅱ期、遠江Ⅳ期前半）に位置づけることができる。

**分布の特徴**　既往研究（佐藤 2005）や前稿（大谷 2018）でも論じたが、横長心葉形轡の分布は、同一馬装に用いられた可能性が高い棘付花弁形杏葉が、西日本の広島県西本 6 号遺跡から出土していることから、西日本で出土する可能性を否定できないが、遠江（静岡県西部）、美濃以西の西日本では確認されていない。

分布は、青森県鹿島沢古墳から東海道側では静岡県白砂ヶ谷 D2 号墳、東山道側では長野県一本柳古墳まで散在しているが、茨木県（常陸）2 例、群馬県（上野）3 例、静岡県（駿河）4 例（特に東駿河に 3 例）とやや集中する。

このように東日本に偏在するが、千人塚古墳では毛彫文様のある金銅製吊金具が伴うこと、共伴率が高い棘付花弁形杏葉は金銅製であり、仏教美術文様と関連性が高く（古川 2015）、さらに横長心葉形轡Ⅱ段階以降御蔵上 3 号墳、御崎古墳などが金銅製であることから、畿内王権により生産され、東日本の有力者層に配布された可能性が高い。千人塚古墳の被葬者は、古墳時代終末期に畿内王権と関係性を持っていたことが想定できる。

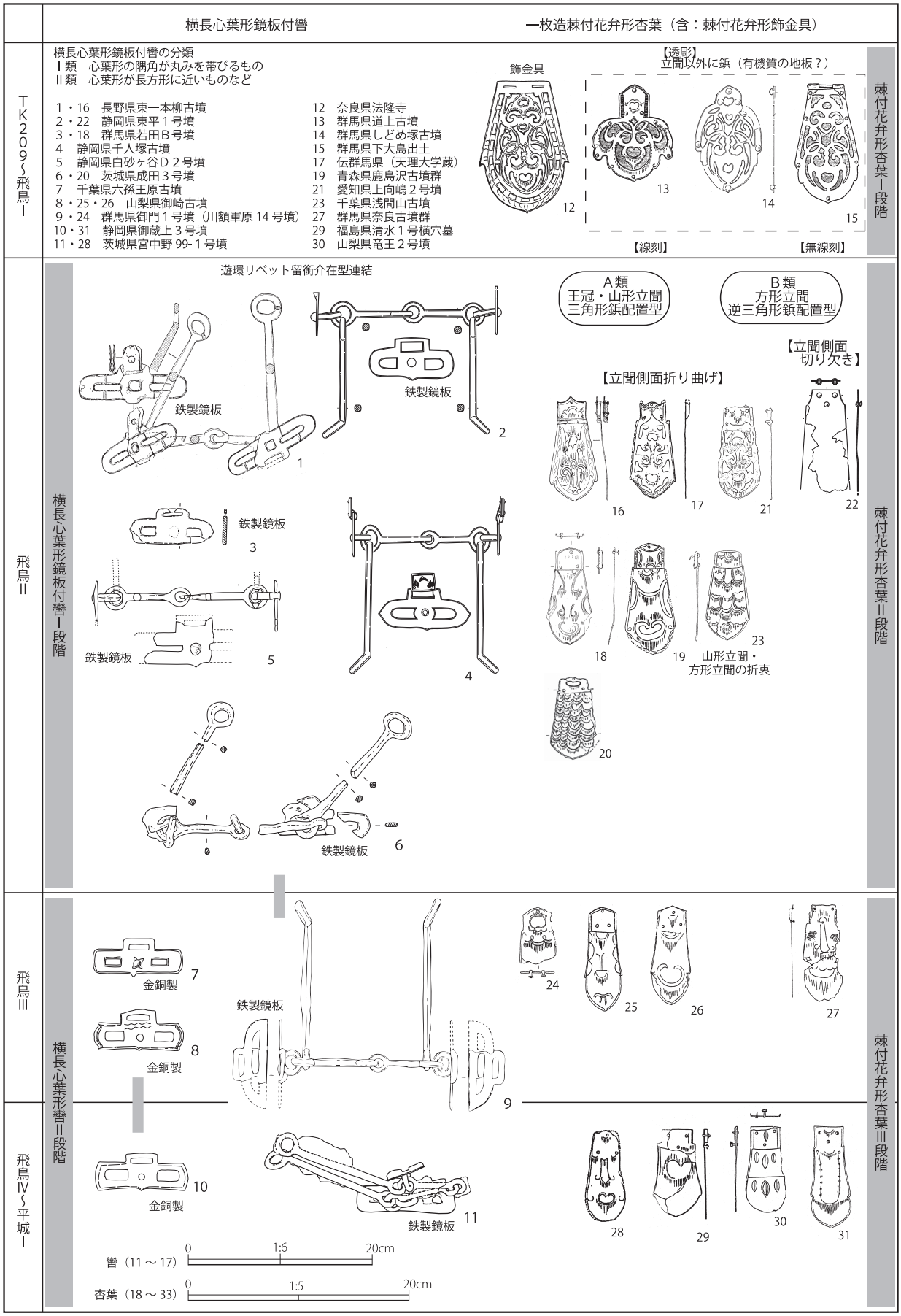
### （3）千人塚古墳の馬装復元と階層性

**馬装復元**　千人塚古墳では、横長心葉形轡と鉸具造立聞円環轡の 2 点が出土していることから、少なくとも 2 組が副葬されたことがわかる。

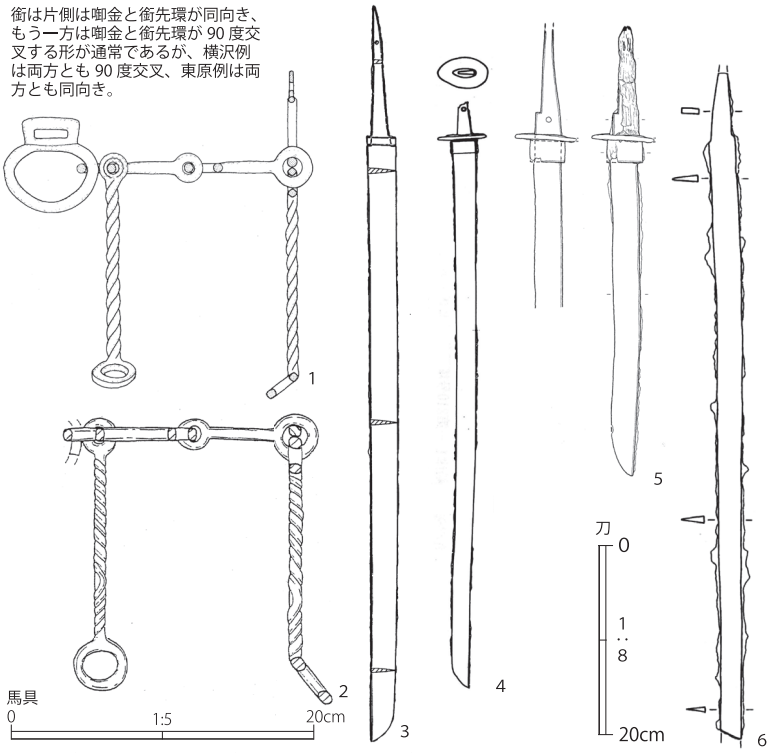
横長心葉形轡は、棘付花弁形杏葉が共伴することが多く、横長心葉形轡出土古墳 14 基に対し 8 古墳（3 分の 2）で共伴しており、同一馬装を構成する可能性が高い。千人塚古墳の石室内は完全に調査されたわけではないことから、今後棘付花弁形杏葉が出土し、横長心葉形轡と棘付花弁形杏葉が組合された馬装となる可能性を排除できない。

**馬具からみた階層性**　現状では、千人塚古墳では横長心葉形轡、鉸具造立聞円環轡とも鐙のどちらかと組合されて用いられた馬装であることのみしかわからないが、終末期に 2 組の馬具を副葬する古墳は、東駿河では、長泉町原分古墳と、富士市東平 1 号墳、中里 95 号墳しかない。これらの古墳は、馬具のほか装飾付大刀を副葬するなど階層的に上位の古墳であり、千人塚古墳も東駿河地域では同じような位置づけができる可能性が高い。

また、千人塚古墳は直径 21m の円墳であるが、古墳時代後期後半以降で、20m を超える古墳は、富士市船津寺の上 1 号墳（202 号墳）、長泉町下土狩西 1 号墳など数基しかなく、幅を広げて 15m 以上としても、長泉町原分古墳、富士市実円寺西 1 号墳など 10 基程度である。このことから考えて、副葬品全体の様相が未確定であるものの、墳丘規模、石室規模、馬具の複数埋葬など同時期の古墳の中では、頭一つ抜けており、須津古墳群を代表する有力者であった可能性が高いと考えられる。




第 93 図　横長心葉形鏡板付轡と棘付花弁形杏葉の変遷




1　富士市横沢古墳　2　沼津市東原 1 号墳　3　富士市須津 J-6 号墳
4　富士市船津 L-210 号墳　5　富士市船津 L-62 号墳　6　沼津市石川 28 号墳

**第 94 図　東駿河における修理された可能性のある馬具と地域的特色のある刀**

### (4) 修理された馬具

千人塚古墳出土鐙は、兵庫鎖に鋲具を留めるための軸が鋲具の枠金具から飛び出しており、修理が行われたことが明らかである。また、中里 95 号墳の鋲具造立聞円環轡の鋲具部分には鉄板を U 字形に折り曲げて嵌め込んだような痕跡があること、また 98 号墳の轡は引手が左右で長さが異なることが報告されており、修理の可能性がある[註 15]。ここではこれらの修理の位置づけを確認するため、東駿河地域で修理がされた可能性がある馬具をみた上で、修理を支える鍛冶技術について確認しておきたい。

**東駿河地域における馬具の修理**　上述した 3 古墳の事例のほかに、銜先環の向きが通常と 90 度異なる（通常は左右で同じ向きとなる）、富士市横沢古墳の大型矩形立聞円環轡、沼津市東原 1 号墳の円環轡[註 16]が確認できる。横沢古墳例、東原 1 号墳例ともに銜が左右で若干長さが異なることから、修理により短くなったか、あるいは別の轡の銜部品と交換した可能性がある。これ以外では、他地域で確認される銜や引手が片側のみ蕨手状である、引手壺の形状が異なるなどの特徴が確認されるものはなく、ここに示した 4 例のみであり修理の事例は多くはないものの、修理が行われたことが間違いないものが複数存在する。

**東駿河における鉄器生産**　では、東駿河の鍛冶技術はどうか。東駿河では、富士市中原 4 号墳で鉄鉗、三島市中島下舞台遺跡で鞴羽口が出土している（藤村 2017）。また、沼津市的場 3 号墳及び富士市国久保古墳で、鉄器製作工人がその職業を象徴的に示すために利用したとされる鉄鐸が出土している（藤村 2017）。いずれも後期後半以降に位置づけられることから、後期後半には東駿河に鍛冶工人が存在したことは明らかである（鈴木一 2016、藤村 2017）。

また、筆者は、須津古墳群（6 号墳）、船津古墳群（62、210 号墳）などで出土する茎が先細る鉄刀（**第 94 図**）がこの地域の特徴的なものであることから、東駿河で大刀・短刀の生産が行われたことを想定している（大谷 2010）。さらに、尾上元規氏の 30 本以上の鉄鏃を副葬する古墳の被葬者は鉄器生産に関わっていたとする研究成果（尾上 1993）を参考にして、筆者（大谷 2004）、菊池吉修氏（菊池 2016）、藤村　翔氏（藤村 2018）らは、東駿河には鉄鏃を

30 本以上副葬する古墳が多いこと、特徴的な鉄鏃の形態が東駿河にあることから、鉄鏃についても生産が行われていた可能性を想定する。

あくまで直接鍛冶生産の痕跡を示す資料は鉄鉗と鞴の羽口しかないが、東駿河では修理された馬具、茎が先細る大刀・短刀、特徴的な鏃など製品の鍛冶生産が行われていた可能性が高いことがわかる。

つまり、後期後半から末に東駿河で鍛冶関連遺物や生産された可能性がある地域的な製品が存在することから鍛冶技術が導入されていた可能性が高いことから、千人塚古墳出土鐙は地元で修理された可能性が高く、上述した階層性から考えれば、千人塚古墳被葬者は、鍛冶技術を持つ集団を統率する有力者であった可能性が高い。

## 3　鉄製轡からみた須津古墳群

### (1) 東海地方における鉄製轡の分布からみた東駿河

最後に馬具が出土した中里古墳群の位置づけを探るため、まずは東海地方での鉄製轡の分布状況から東駿河の様相を確認したい。

東海地方における旧国（伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、美濃、飛騨、伊勢、志摩）の範囲を 19 地域に区切った状況で、鉄製轡の分布を確認すると、各地で一律に各種の鉄製轡が副葬されているわけでない。中でも東駿河は大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡が集中する地域とすることができることを論じた（大谷 2006）。

その後 15 年が経過し、県内で新東名高速道路建設等に伴う新たに馬具が出土した古墳（静岡県埋文研 2008・2010）や富士市の古墳の報告書（富士市教委 2011・2013・2016・2018）の刊行が相次ぎ、また県外でも多くの古墳の報告書が刊行されたりしたこと、さらに既存資料の再検討（大谷 2013 など）が進んだことから、改めて東海地方（17 地域に区分）における鉄製轡の分布状況を確認したうえで、東駿河の特徴を確認し、中里古墳群の馬具副葬古墳被葬者の性格を考えたい。

**第 95 図**には、主要な鉄製轡である内湾楕円形鏡板付轡、無立聞素環円環轡、兵庫鎖立聞円環轡、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡、吊金具付小型矩形立聞円環轡、無吊金具小型矩形立聞円環轡、瓢形円環轡、大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡の 9 形式について東海地方における地域ごとの出土数を示した。

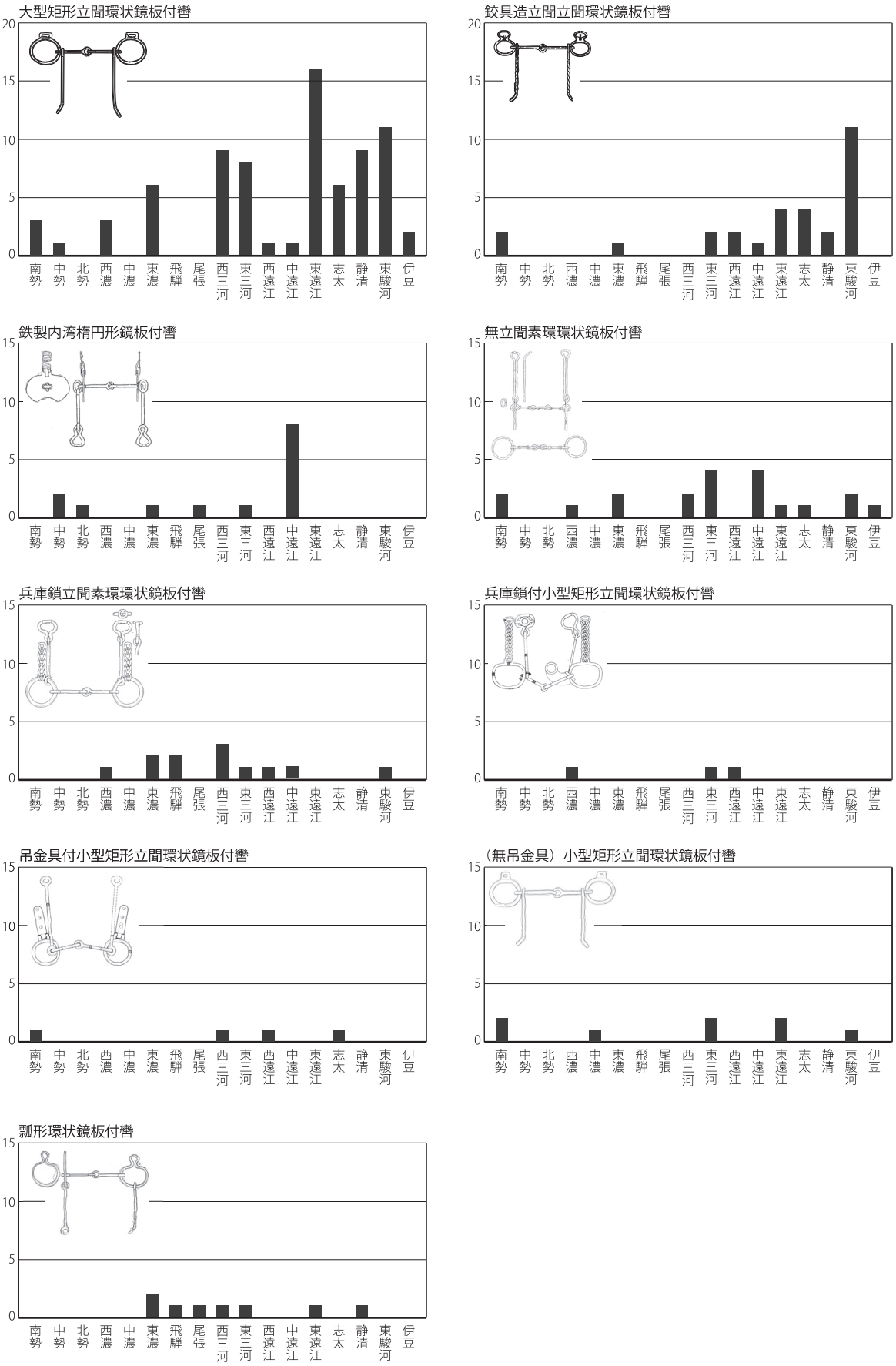
各形式の分布の特徴について詳述しないが、前稿（大谷 2006）で述べたとおり形式ごとに分布が異なることが明白である。

東駿河の状況は、古い形式である内湾楕円形鏡板付轡、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡は現状で確認されておらず、基本的に後期前半までは馬具の副葬自体が限られている。また、後期後半に主に用いられる瓢形円環轡、吊金具付小型矩形立聞円環轡も確認されていない。一方で、後期後半以降大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡の副葬が増加する。この出土数を他地域と比較すると、大型矩形立聞円環轡は東海地方では東遠江に次ぐ数量、鉸具造立聞円環轡は東海地方では最も出土する地域である。後期末以降に位置づけられるものが多く、後期末以降両者のうちのどちらかが副葬される古墳が増加することが特徴的である。

東駿河での副葬が多い大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡は、金銅装鞍金具や杏葉と組合されることが多く、規格性が高い轡とされること（岡安 1984・1985）から、畿内王権との関係が深い鉄製轡形式であると考えられる（大谷 2006）。また、中原 4 号墳で 3 組の鉄製轡が出土し、筆者は宮代栄一氏の研究（宮代 2015）を参考に、馬具が 3 組以上副葬された古墳の被葬者は馬匹生産に関わっていた可能性が高く、中原 4 号墳の被葬者も馬匹生産を行っていたと想定した（大谷 2016）。中原 4 号墳の後には東平 1 号墳などの被葬者がその生産を引き継いでいた可能性を想定した（大谷 2018）が、今回の分析でも大型矩形立聞・鉸具造立聞円環轡という畿内王権との関係が深い轡を副葬する古墳が増加しており、古墳時代後期後半～終末期に、畿内王権との関わりで馬具が入手され、後期後半に東駿河で馬匹生産・飼養が開始され、終末期までそれが継続していたことの証左となろう。

### (2) 鉄製轡からみた東駿河の中の須津古墳群

**轡の種類による被葬者の性格差はあるか？**　須津古墳群では、須津 6・159 号墳、中里 98・99 号墳で




第 95 図　東海地方における鉄製轡の形式別出土数

**第 5 表　東駿河における環状鏡板付轡出土古墳とその出土遺物**

| 古墳名 | 墳形 | 規模 | 環状鏡板付轡 | | | 金馬具 | 装飾大刀 | | | | | 主な副葬品 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 大型 | 鉸具 | 他 | | 圭 | 頭 | 双 | 単 | その他 | |
| 夏梅木 6 | 円 | 11.1 | | ● | | | | | | | 双龍か？ | |
| 下土狩西 1 | 円 | 20 | ● | | | | | ● | | | 方頭 | |
| 原分 | 円 | 18 | | ●● | | 鞍・心杏 | ● | | | | 鉄製銀象嵌円頭 | |
| 上ノ段 2 | 円 | 14 | | | ● | | | | | | | |
| 上出口 1 | 円 | - | | | ● | | | | | | | |
| 石川 2 | 円 | 9 | ● | | | | | | | | | |
| 石川 T5 | 円 | 13 | | ● | | | | | | | | |
| 東原 1 | 円 | 15.3 | | | | | | | | | | |
| 東原 2 | 円 | 13.5 | | | | | | | | | | 銅釧 |
| 東本郷 3 | 円 | - | ○ | | | | | | | ● | | |
| 船津 L62 | 円 | - | | ● | | | | | | | | 砥石 |
| 須津 J6 | 円 | 13 | ● | | | | | | | | | |
| 須津 J159 | 円 | 10 | ● | | | | | | | | | |
| 千人塚 | 円 | 21 | | ● | | 横長心葉形轡 | | | | | | |
| 中里 K95 | 円 | 12 ± | | ● | | | ● | | | | | |
| 中里 K98 | 不明 | - | ● | | | | | | | | | |
| 中里 K99 | 不明 | - | ● | | | | ○ | | | | | |
| 鵜無ケ淵・間門 E6 | 不明 | - | ● | | | | | | | | | |
| 比奈 G40（かぐや姫） | 円 | 15 | | ● | | | | | | | | 鉄製紡錘車 |
| 国久保 | 円 | 8 | | ● | | | ●銀 | | | | | 雁木玉・鉄鐸 |
| 中原 4 | 円 | 11 | ● | | ●● | | | | | | 鹿角装・象鍔剣、象鍔 | |
| 東平 1 | 円 | 13 | ● | | | 横長心葉形轡 | | | | | 鉄製円頭・象鍔 2 | 丁字形利器 |
| 横沢 | 円 | 16 | ● | | | 金銅製鈴 | | | | | | 金銅装飾金具 |
| 室ヶ谷 3 | 不明 | - | | ● | | | ● | | | | | 紡錘車・砥石 |

※環状鏡板付轡　大型＝大型矩形立聞環状鏡板付轡　鉸具＝鉸具造立聞環状鏡板付轡　その他＝大型、鉸具以外の環状鏡板付轡
※金馬具　金馬具＝金銅装馬具　鞍＝鞍金具（海金具・磯金具）　心杏＝心葉形杏葉
※装飾大刀　象嵌装＝象嵌装鍔付大刀　圭＝圭頭大刀　頭＝頭椎大刀　双＝双龍環頭大刀　単＝単龍環頭大刀

は大型矩形立聞円環轡、千人塚古墳、中里 95 号墳では鉸具造立聞円環轡が副葬される。東駿河では複数の円環轡が副葬され、両者とも形式がわかるものは少ない。唯一判明する原分古墳では 2 点とも鉸具造立聞円環轡である（註 17）。大型矩形立聞円環轡に時期が古いものが多いということも考慮すべきであるが、終末期前半には大型矩形、鉸具造立聞ともに副葬されているが、東駿河では現状で共伴することはない。また、古墳群ごとにその 2 種が排他的に副葬されているわけではなく、須津古墳群（須津支群、中里支群）、石川古墳群では同一古墳群中には大型矩形立聞円環轡を副葬する古墳もあれば、鉸具造立聞円環轡をもつ古墳もある。古墳群ごとに副葬される形式が固定されているわけではない。

この違いは何なのか。大型矩形立聞・鉸具造立聞円環轡とも造付立聞であり、系譜的には関連すると考えられているが（岡安 1984）、被葬者の有する性格や出自などになんらかの違いが反映されている可能性がある。

**第 5 表**には、東駿河の円環轡出土古墳の主な副葬品を掲載しているが、鉸具造立聞円環轡出土古墳の中里 95 号墳、原分古墳、国久保古墳、室ヶ谷 3 号墳で圭頭大刀が出土しており、親縁性が高い。この 4 古墳は副葬品が豊富であることを考慮すると、東駿河では鉸具造立聞円環轡を副葬する古墳の方がやや階層的に優位である可能性がある。

**須津古墳群の被葬者の性格**　東海地方の鉄製馬具の副葬からみた東駿河の特徴と、東駿河における鉄製轡の特徴から、最後に須津古墳群馬具副葬古墳の被葬者像を明らかにしたい。

上述した通り、東駿河～富士川西岸-黄瀬川流域、箱根山麓まで～は、馬具が多く副葬される地域である（大谷 2006）。こうした馬具が多く副葬される東駿河において須津古墳群の馬具出土古墳の位置づけを探るため、東駿河における鉄製轡を時期ごとに表示した（**第 96 図**）。

副葬された轡の時期を確認すると、～盗掘などにより開口しており、すでに遺物が失われた古墳があることが予想されるため、現状で判明する限りであるが～、東駿河では、後期前半～中頃の沼津市松長 6 号墳、同荒久城山古墳に金銅装馬具が副葬され、つづいて TK43 ～ 209 型式期に富士市中原 4 号墳で 3 点の円環轡が、TK209 型式期に中里 98・99 号墳、鵜無ヶ淵・間門 6 号墳で大型矩形立聞円環轡、東本

| | 大型矩形立聞環状鏡板付轡 | 鉸具造立聞環状鏡板付轡 | その他の環状鏡板付轡・心葉形鏡板付轡 |
|---|---|---|---|
| TK43 | 1 中里K-98号墳<br>2 鵜無ヶ淵・間門E-6号墳<br>3 中里K-99号墳<br>4・22・23 中原4号墳<br>5 東本郷3号墳<br>6 横沢古墳<br>7・26 東平1号墳<br>8 下土狩西1号墳<br>9 須津J-6号墳<br>10 須津J-159号墳<br>11 石川2号墳<br>12・20 原分古墳<br>13 東原2号墳<br>14 中里K-95号墳<br>15 船津L-62号墳<br>16 国久保古墳<br>17 夏梅木6号墳<br>18 かぐや姫古墳<br>19 石川T5号墳<br>21 室ヶ谷3号墳<br>24 上出口1号墳<br>25 上ノ段2号墳<br>27 千人塚古墳 | | 小型矩形立聞 22<br>23 兵庫鎖立聞素環 |
| TK209～飛鳥I | 1 2 3 4 5 6 | 12 13 | 0 1:10 30cm |
| 飛鳥II | 7 8 9 10 11 | 14 15 16 17 18 19 20 21<br>千人塚古墳 | 無立聞素環か？ 24<br>無立聞素環 25<br>鉄製横長心葉形轡 26 27 |
| 飛鳥III～平城I | | | |

第96図　東駿河における環状鏡板付轡・鉄製横長心葉形轡の編年的位置づけ

郷3号墳で大型矩形の可能性が高い円環轡が副葬され、中里95号墳で円環轡が副葬された可能性が高く、また同時期に、富士宮市別所1号墳の金銅装馬具、長泉町原分古墳の三葉文心葉形杏葉の馬具セット、鉸具造立聞円環轡が入手された可能性がある。

TK209型式期まではそれほど副葬数は多くはないものの、終末期前半（飛鳥Ⅱ期、TK217型式期）になると、鉄製轡の副葬が急増し、東平1号墳、須津6・159号墳などで大型矩形立聞円環轡、中里95号墳、千人塚古墳などで鉸具造立聞円環轡が副葬される。一方、東駿河では稀有な、無立聞素環円環轡が長泉町土狩五百塚古墳群の上出口1号墳、上ノ段2号墳に副葬される[(註18)]。この時期には鉄製横長心葉形轡が富士地域で2例出土している。終末期後半には、馬具副葬は激減し、土狩五百塚古墳群中の御蔵上3号墳などに限定される。

また、東駿河では発掘調査された古墳が多いが、沼津市石川古墳群では新東名高速道路建設に伴い調査が行われた31基中1基（3%）、富士市伝法古墳群では19基中4基（21%）、富士市船津古墳群では16基中1基（6%）のみであり、副葬割合はそれほど多いわけではない。一方で、須津古墳群（須津古墳群、中里古墳群）では、調査された10基中（中里古墳群4基、須津古墳群6基）6基から轡が出土しており、概ね半数の古墳から馬具が出土している。これは非常に高い数値といえる。

このように須津古墳群は馬具副葬古墳が古墳時代後期末から終末期まで連続し、かつ同時期に複数存在し、さらに馬具副葬古墳が多い東駿河にあっても馬具副葬率が高いことを評価すれば、須津古墳群の被葬者集団は、馬匹生産を実際に行った主体であった可能性があり、平時においては馬匹生産・飼養（、馬匹を利用した運搬・交易）、軍事においては騎兵～岡安光彦氏による「東国舎人騎兵」の可能性がある（岡安1986）～として活躍した可能性を想定してよいのではないか。

**中里98・99号墳の被葬者**　中里98・99号墳例は、東駿河における円環轡としては古手に当たる。中原4号墳の検討の際、中原4号墳の被葬者が手工業生産、馬匹生産など各種の技術を総括するような立場であったことを想定したが、東駿河で馬匹生産が行われたとすれば、中原4号墳と同時期に位置づけられる中里98・99号墳、鵜無ヶ淵・間門6号墳の被葬者は、それに関わった可能性がある。

**中里95号墳の被葬者**　中里95号墳では、圭頭大刀と轡（円環轡の可能性が高い）がTK209型式期に位置づけられる可能性があり、鉸具造立聞円環轡は1段階後出することから、当古墳の被葬者はTK209～飛鳥Ⅱ期の2時期にわたり馬具を入手していた可能性が高い。墳丘規模や石室規模は不明確であるが、圭頭大刀、馬具の複数組の副葬など階層性は上位に位置づけられることから、98・99号墳など（馬匹生産）を支える集団を統率するような有力者像を描くことができる。

**千人塚古墳の被葬者**　千人塚古墳は、馬具からみれば特異な横長心葉形轡と鉸具造立聞円環轡を保有しており、両馬具とともに畿内王権との関係性が考えられる。また墳丘・石室規模ともに同時期では東駿河最大規模であることから、東平1号墳、実円寺西1号墳、原分古墳、下土狩西1号墳と並ぶ最上位の古墳の一つであることは間違いない。千人塚古墳は、古墳時代終末期に、中里古墳群、須津古墳群を傘下におき、馬匹生産や鍛冶生産を総括する被葬者と考えることができようか。

ただし、奈良時代以降富士郡の中心は、伝法古墳群の地にあり、須津古墳群の築造者集団が千人塚古墳の後、どのような変遷をたどるのか、伝法古墳群と比較しながら位置づけていく必要があろう。

**謝辞**

小論の執筆にあたり、検討の機会を与えていただいた富士市教育委員会　佐藤祐樹氏、藤村　翔氏に深謝いたします。

また、馬形埴輪（裸馬）の事例の収集、文献探索に当たり、河内一浩氏、栗林誠治氏、寺前直人氏、深澤敦仁氏、宮代栄一氏、村瀬　陸氏の御協力いただいた。

銘記して深謝いたします。

**註**

1　東駿河の古墳群は西から順にアルファベットが付加されており、例えば中里古墳群は「K」、須津古墳群は「J」であり、東駿河における K 古墳群は中里古墳群のことである。中里古墳群に A ～ K まで支群があるわけではないことから、ここではアルファベットを除いて表記する。

2　富士市教育委員会による集成（富士市教委 1988）では、本書で報告される中里古墳群 3 基のほか、76 号墳（先陣塚古墳）から馬具が出土したとされるが破片のため詳細不明である。また、第 2 章で報告する、狭義の須津古墳群では、千人塚古墳のほか、6・159 号墳（静岡県埋文研 2010）、神谷大塚古墳（30 号墳）から馬具が出土している。

3　円形金具は、刀剣の鍔の可能性があるが、平面及び内孔の形状が倒卵形ではないこと、中里 98 号墳例は鉄板（棒）を折り曲げて円形にした際の接着箇所が看取できること、鍔とすると幅が狭いことなど、鍔には確認できない属性が多いことから刀剣の鍔である可能性は極めて低い。

4　報告（図）では、9 点の可能性が指摘されているが、8 点目は半分ぐらいの破片であり、9 点目は先端の破片であることから 8 点目と 9 点目は同一個体の可能性が高いと想定するため、筆者は 8 点と考える。

5　本書では、須恵器における陶邑田辺編年（田辺 1981）、西弘海氏の編年（西 1978）、鈴木敏則氏の遠江編年（鈴木 2004）を用いる。

6　註 3 参照

7「無口頭絡」は、銜、引手を伴わない、荷馬などに利用された繋索用の頭絡である。

なお、轡を伴う面繋は両手綱であるが、無口頭絡で手綱がつくものは片手綱である。

8　註 4 参照

9　第 87 図の出典は第 3 表の文献より。

10　島根県岡田山 1 号墳の報告者である西尾良一氏は、「環状繋絡金具」とし、「革紐が結びつけられた痕が三箇所明確にみられ、馬装における金具であることが認められ」、「残る革銹の色も、黄色、赤褐色、黄褐色とあり、革紐も色鮮やかなものであったこと」、「残存する革紐の推定幅は 2.2 ～ 2.8cm であり、雲珠・辻金具 B の繋絡紐に結びつくものである」とした（島根県教委 1987）。

11　物集女車塚古墳では、横穴式石室玄室の家形石棺手前で f 字形鏡板付轡・剣菱形杏葉などとともに円形金具が出土するとともに、羨道から大型矩形立聞円環轡とともに帯金具、円形金具が出土している。f 字形鏡板付轡の馬装に伴う環状雲珠と大型矩形立聞円環轡に伴う組合式環状雲珠が用いられた可能性がある。

大型矩形立聞円環轡は TK43 型式期に位置づけられるものであり、少ないながらも組合式環状雲珠が用いられていた証拠となる。

12　これ以外で円形金具は確認できないが、裸馬の事例で、轡の表現がないことから、無口頭絡を表現した可能性があるものとして、埼玉県割山埴輪窯出土例（**第 89 図 4**）、群馬県太田市高林西原古墳群出土人物騎乗の馬形埴輪などがある。

また、甲塚古墳の馬形埴輪 5（報告書の 3。裸馬）・6（報告書の 4。裸馬）は円形の環（辻金具）が片面 2 点ずつ表現されている。ただし、5 が耳側は 4 条の革帯（宮代氏のいう複条系）を繋ぐのに対し、6 は 3 条（宮代氏のいう単条系）を繋いでいる。当該埴輪は、発掘調査中に口先部分の盗難にあい、出土時に撮影された写真を基に図化しているとのことであり、轡が表現されていなかったか若干不安な面があるが、手綱が片側のみの表現であり、乗馬に伴う面繋ではなかったことがわかる（日高 2014）。

13　観音塚古墳は、金銅装鏡板付轡をはじめ複数の轡が出土しているが、鏡板・銜・引手の連結が外れ、組合関係が明確ではなく、正確な出土数は、鏡板、銜や引手の数から 5 組以上であることしかわからない。宮代栄一氏は、鉄製円形金具を鏡板と判断し、轡の数量は 8 組と想定している（宮代 2016）。これに無口頭絡を含めると 9 ～ 10 組となる。

14　千人塚古墳は、開発行為が原因で発掘調査されたものではないため石室内部が調査されたものの床面までは掘り下げられていない。このため一部取り上げず現地保存した遺物があり、ここで報告する遺物が副葬品の全てではない。鉸具造立聞円環轡は取り上げられていないことから、**第 92 図**に図示していない。本書 37・38 頁を参照願いたい。

15　中里 95 号墳出土鉸具造立聞円環轡の頸部には中央部に透がある鉄板を U 字形に折り曲げて刺金を通し、頸部を補強したような状況として報告されているが、この部分の錆化が進行しており、100% 確実に修理が行われたとは言い難いことを明記する。

16　通常銜は啣金を 90 度で組合せることで外側の銜先環は向きが一緒になる（片側の銜は啣金と銜先環が 90 度異なり、もう片側は同方向になる）。横沢例は、銜の左右が両方とも同方向（8 字形）、東原例は両方とも 90 度で交差するものであり、通常と異なる。

銜の左右で向きが異なることで、引手の長さは一緒でも、連結が不自然となるとともに手綱の長さが異なる。

この 2 例のように銜先環の向きが異なるものを東海地方で確認すると、愛知県豊橋市上向嶋 2 号墳のみであり（東海古墳文化研 2006）、多くの轡が出土している東海地方でも 3 例しかない。

17　東海地方での円環轡が複数副葬された古墳は、三重県前山古墳（伊賀地域、大型矩形立聞 2 点）、山添 2 号墳（大型矩形立聞 2 点）、南山古墳（無立聞素環・大型矩形立聞各 1 点）、岐阜県西洞山 6 号墳（兵庫鎖立聞素環・大型矩形立聞各 1 点、**第 88 図**）、大牧 1 号墳（兵庫鎖立聞素環 1 点、瓢形 2 点）、愛知県下山古墳（大型矩形立聞 2 点）、根川 1 号墳（兵庫鎖立聞素環 2 点、無立聞素環 1 点）、三ノ輪山 1 号墳（小型矩形立聞・大型矩形立聞各 1 点）、寺西 1 号墳及びとうてい山古墳（大型矩形立聞各 3 点）、上向嶋 2 号墳（鉸具造立聞・大型矩形立聞各 1 点）、静岡県掛川市原 7 号墳（大型矩形立

鬨 2 点、鉸具造立鬨 1 点）、八幡 2 号墳（大型矩形立鬨 2 点）、賤機山古墳（大型矩形立鬨 2 点、瓢形・鉸具造立鬨各 1 点）、中原 4 号墳（兵庫鎖立鬨・無吊金具小型矩形立鬨・大型矩形立鬨各 1 点）である。大型矩形立鬨と鉸具造立鬨は上向嶋 2 号墳と原 7 号墳、賤機山古墳の 3 基で共伴している。

18　報告の趣旨とは離れるため詳述しないが、東駿河では上出口 1 号墳、上ノ段 2 号墳で、「江田船山型端環装飾」（岡安 1984）のある引手・銜をもつ無立鬨素環円環轡が出土しており、両者ともに鏡板の断面は板状（長方形）であり、これは宮代栄一氏により北部九州型（宮代 1998）とされるもので、九州との関係でもたらされた可能性がある。円環轡から考えると、土狩五百塚古墳群の特殊性が判明し、大型矩形立鬨・鉸具造立鬨円環轡とは入手経路が異なる可能性が高い。

**参考文献**


【論文等】

天羽 敏夫　1976「徳島県下における横穴式石室の一様相その 2」『徳島県博物館紀要』8　徳島県博物館

内山 敏行　2011「栃木県域南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群』　壬生町立歴史民俗資料館

大谷 宏治　2004「東と西の狭間」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 20 周年記念論文集』

大谷 宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』　東海古墳文化研究会

大谷 宏治　2008a「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2008b「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40　静岡県考古学会

大谷 宏治　2010「古墳時代後期～終末期の古墳について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2016「中原 4 号墳出土大刀と馬具からみた被葬者の性格」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

大谷 宏治　2018「東平 1 号墳の馬具と刀剣からみた被葬者像」『東平第 1 号墳』　富士市教育委員会

大谷 宏治　2019「東海地方における古墳時代の馬文化」『馬の考古学』　雄山閣

岡安 光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

岡安 光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

岡安 光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71 巻 4 号　日本考古学会

岡安 光彦　1987「遺物編年の現段階（馬具）」『古墳文化研究会第 7 回研究発表・討論会発表要旨』（古墳文化研究会 2010『日本古代文化研究』に所収）

尾上 元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』40 巻 1 号　考古学研究会

川江 秀孝　1992「馬具」『静岡県史』資料編 3　考古 3

菊池 吉修　2016「中原 4 号墳出土鉄鏃について」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

群馬県古墳時代研究会　1996『群馬県内出土の馬具･馬形埴輪』

斎藤 弘　1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

堺市博物館 1972『埴輪と鉄器具が語る巨大古墳とその周辺』

佐藤 信孝　2004「群馬県高崎市若田 B 号墳出土馬具の検討 - 毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10　専修大学考古学会

佐藤 信孝　2005「終末期古墳出土馬具の変遷 - 長方形鏡板付轡の変遷」『電脳考古学』1

白井 久美子　2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』　千葉県史料研究財団

鈴木 一有　2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木 一有　2016「中原 4 号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

鈴木 敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会

田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢－滝口宏先生古希記念考古学論集』　早稲田大学出版部

田辺 昭三　1981『須恵器大成』

東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』

西 弘海　1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』II　奈良国立文化財研究所

日高 慎　2014「甲塚古墳の埴輪配列について」『甲塚古墳』　下野市教育委員会

藤村 翔　2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態」『東海地方における古墳時代の手工業生産の展開を考える』　考古学研究会東海例会

藤村 翔　2018「東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義」『伝法　東平第 1 号墳』

古川 匠　2015「鞍作止利の技術系譜と古墳時代の馬具」『同志社大学考古学シリーズXI　森浩一先生に学ぶ』　同志社大学考古学シリーズ刊行会

松尾 充晶　1999「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』　島根県古代文化センター

宮崎 由利江　1987「『裸馬』の埴輪に関して」『埼玉の考古学　柳田敏司先生還暦記念論文集』　新人物往来社

宮代 栄一　1995「飯氏二塚古墳出土の馬具」『飯氏二塚古墳』　福岡市教育委員会

宮代 栄一　1996a「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』　島根県立八雲立つ風土記の丘

宮代 栄一　1996b「倭人たちの馬装」『黄金に魅せられた倭人たち』　島根県立八雲立つ風土記の丘

宮代 栄一　1996b「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』9　肥後考古学会

宮代 栄一　1998「古墳文化における地域性 - 九州地方出土の環状鏡板付轡を中心に - 」『駿台史学』102　駿台史学会

宮代 栄一　2015「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳群出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6　熊本古墳研究会
宮代 栄一　2016「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討」『埼玉考古』51　埼玉県考古学会
森田 安彦　2005「毛彫施文の金銅装棘付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』 江南町教育委員会

【報告書】
安濃町教育委員会　1999『西相野遺跡・ツヅミ遺跡発掘調査報告書』
大阪府文化財センター　2007『寝屋南遺跡・奥山遺跡』
太田市教育委員会文化財課　2009『世良田諏訪下遺跡』
各務原市教育委員会　1991『西洞山古墳群発掘調査報告書』
加藤学園沼津考古学研究所　1970 『本宿上ノ段古墳』
熊谷市教育委員会　2004『武人還る』
熊谷市史編さん室　2015『新熊谷市史』資料編 1　考古
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992『神保下條遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011『大道西遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
島根県教育委員会　1987『出雲岡田山古墳』
下野市教育委員会　2014『甲塚古墳』
昭和村教育委員会　1996『川額軍原 I 遺跡』
高崎市教育委員会　1992『観音塚古墳調査報告書』
高取町教育委員会　1984『市尾墓山古墳』
栃木県教育委員会　1974『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』
千葉県史編さん委員会　2003『千葉県史』資料編 3
千葉県史料研究財団　2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』
天理市教育委員会　2011『天理市埋蔵文化財センターたより』Vol.12　中国上陸記念荒蒔古墳の埴輪展
長泉町教育委員会　1974『上出口古墳』
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
沼津市史編さん委員会　2002『沼津市史』資料編 2
富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
富士市教育委員会　2011『平成 13 年度富士市内遺跡・伝法国久保古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会　2013『船津古墳群 II 』
富士市教育委員会　2016『伝法　中原古墳群』
富士市教育委員会　2018『伝法　東平第 1 号墳』
三島市教育委員会　2000『夏梅木遺跡群』
向日市教育委員会　1988『物集女車塚』
由比町教育委員会　1986『室ヶ谷遺跡群（室ヶ谷遺跡・室ヶ谷 3 号墳）発掘調査報告書』

**図の出典**

**第 86・92 図**　本書から引用
**第 87 図**　第 3 表参考文献による
**第 88 図**　飯氏二塚古墳（宮代 1995）、物集女車塚古墳（宮代 1996）、西洞山 6 号墳（各務原市教委 1991）
**第 89 図**　1　群馬県埋文 1992、2　熊谷市史編さん委 2015、3　千葉県史編さん委 2003、4　宮崎 1987、5・6　下野市教委 2014
**第 90 図**　群馬県埋文 2011
**第 91 図**　筆者の指示のもと富士市教育委員会作成
**第 93 図**　1・16　土屋長久編 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、2・22　富士市教委 2018、3・18　佐藤 2004、4　本書、5　藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』、6・20　茨城県教育財団 1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 I 』、7　千葉県史編さん委 2003、8・25・26　山梨県 1999『山梨県史』資料編 2　原始・古代 2、9・24　昭和村教委 1996、10・12・13・15・31　田中新史 1980、11・28　茨城県教育委員会 1970『宮中野古墳群調査報告』、14　田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢 - 滝口宏先生古希記念考古学論集』 早稲田大学出版部、石川正之助・佐藤信孝ほか 2010「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編　高崎市、17・19・23・27・29　白井久美子 2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』 千葉県史料研究財団、21　愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976『二本松古墳群』、27　沼田市教育委員会 2001『奈良古墳群』、30　山梨県教育委員会 1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 北巨摩郡双葉町地内 2-』
**第 94 図**　1　富士市教委 1988、2　沼津市史編さん委 2002、3　静岡県埋文研 2010、4　富士市教委 1999、5　富士市教委 2013、6　沼津市教委 2006
**第 95 図**　筆者作成。
**第 96 図（第 5 表）**　1・3・14・27　本書、2・9・10　静岡県埋文研 2010、4・22・23　富士市教委 2016、5・13・19　沼津市史編さん委 2002、6・18　富士市教委 1988、7・26　富士市教委 2018、8　川江 1992、11　沼津市教委 2006、12・20　静岡県埋文研 2008、15　富士市教委 2013、16　富士市教委 2011、17　三島市教委 2000、21　由比町教委 1986、24　長泉町教委 1974、25　加藤学園 1975
**第 4 表**　文献 1　茨城県教育財団 1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 I 』、2　茨城県教育委員会 1970『宮中野古墳群調査報告』、3　千葉県 2003、4　佐藤 2005、5　昭和村教委 1996、6　佐藤 2004、7　山梨県 1999『山梨県史』資料編 2　原始・古代 2、8　土屋長久編 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、9　田中 1980、10　富士市教委 2018、11　藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』